博士論文

金石類を中心とした漢代篆書の書法史的研究

論文要旨

平成 28 年度

筑波大学大学院　人間総合科学研究科

博士後期課程芸術専攻

安生　成美

筑波大学

漢（BC206 - AD220）は、隷書が通行していた時代であったが、前代に用いられていた篆書も依然として消滅することなく受け継がれており、この時代の篆書は「漢篆」と称されている。本論文では、先行研究で掲げるような瓦塼・印章・題記（石刻）といった硬質の素材（本論文では、これらの素材を「金石」と総称しておく。）に銘刻・鋳造された漢篆を対象とする。

各種の金石類において多種多様に展開する漢篆書法は、先行研究で相互の関係が指摘されている。しかし、それらは概括的な論及にとどまり、各種金石の素材を越えた書法展開の共通性について、十分に精査されていない。

そこで本論文では、各種金石類の漢篆書法の特徴について分析を加え、時系列的な変遷を辿ることで、展開の傾向を考察するとともに、それらの比較検討によって、各金石類に共通してどのような展開が見られるのかという問題を解明してゆきたい。従来個別的に語られてきた漢篆の「多様性」について、素材を越えた展開の類型を提示する点が本論文の新たな試みである。

本論文は、序章と結章の他、7 つの章で構成される。

まず、第 1 章では、金属器に鋳造・彫刻された銘文、いわゆる金文を対象とし、主に銅器、度量衡器、洗器に施された篆書について、その書法史的展開を考察した。

前漢鼎彝器を中心とする金文は、方正で直線的な構成である点を除き、秦の小篆を継承するが、次第に収筆を屈曲させ、僅かではあるが収筆を紡錘形の形状に太細の変化を持たせ、字座に変化も見られる。即ち秦の小篆に依拠しつつ、筆画の厳密な分間布白を優先し、筆画を屈曲させる後の時代の変化の萌芽が見られるようになる。

一方で、洗など水器類を中心に見てみると、それらは二つに分類することができた。Ⅰ類が直線を主体とするもので、Ⅱ類が主に横画や転折が曲線で構成されるものである。Ⅰ・Ⅱ類の書法が洗練されてゆく過程には、洗器に施された紋様との関わりが示唆される。

総じてその変遷を辿ると、筆画の厳密な分間布白を優先し、筆画を屈曲させる繁雑化が徐々に現れてくる。さらに、各字の字座を画数に応じた変化も見られる。その繁雑化の後には、隷書の影響も看取でき、直線を主体とした簡素な書法へと変遷することを導が明らかになった。

第 2 章では、印章、特に刻風が多種多様であることが指摘されている私印の篆書に着目し、その書法史展開を考察した。

前漢私印の篆体は、直線を主体とするⅠ類と曲線を主体とするⅡ類とに分けられる。これらを制作年により変遷と辿ってみると、武帝期を中心に、対称性の厳密化、筆画による空間分割の均一化、横画全体に緩やかなたわみの出現といった点において徐々に変化が認められた。先行研究では武帝期以前を過渡期とするが、寧ろ武帝期が過渡期に相当することが明らかとなった。但し、武帝期以後には、一部に円弧を描く筆画の反復による新しい装飾法が見られ、新たな篆体の創出は、前漢期の広汎な時期に亘り、漸次的に展開したことが推察される。

第 3 章では、軒先瓦に施された銘文、いわゆる瓦当文の篆書について、その書法史的展開を考察した。特に、陝西地方の「長生未央」「長楽未央」の四字句文字瓦当に注目すると、それは書法上の点からⅠ～Ⅳ類の四つに分類することができた。前漢早期のⅠ類から乳の出現が見られるⅡ類へと推移し、連珠紋や櫛歯紋を施すⅢ類へと変遷する。Ⅳ類は、Ⅱ類からⅢ類に移り変わる際の中間型もあり、これをⅣ類とした。Ⅰ類からⅢ類への変遷では、乳の拡大に伴い、瓦面がさらに縮小され、筆画の省略のみならず、分間布白に留意するため、文字を伸縮させる工夫も見られるようになる。このように、前漢中晩期ごろから、形状の変化に伴い、瓦当独自の篆書が台頭する。中でもⅢ類は、文字面積が縮小し、筆画の減少や中心線が扇形に同心円弧の形状に変化することにより最も特徴的な瓦当書法が認められた。

一方で、山東地方の瓦当は、中央部に乳を有するものが少なく、書体は整斉とした正面を向く篆書が多い。後漢に至ると雲紋様と調和させるような書法へと変遷を辿ることを指摘した。

第 4 章では、主に墓室の建築資材として用いられた塼の銘文を対象に、その篆書の書法史的展開を考察した。紀年を記した有紀年塼は、書法の変遷からみて 3 期に区分することができる。第 1 期（B.C.116 年～A.D.12 年）は、小篆を主体とした書法で、第 2 期（13 年～119 年）は、文字を紋様化するように筆画を屈曲させ、画数に応じて字座を変化させる意識も窺うことができる。そして第 3 期（120 年～220 年）は、筆画を簡素化させ、直線化させる傾向になることが認められた。

吉祥句を記した吉祥塼は、書法が簡素化するものと繁雑化するものとが見られた。それらの意匠の施し方は、有紀年塼の第 2 期のように、文字を紋様化するように筆画を屈曲させたりすることで繁雑化させるものがある。一方で、字形を構成する要素が直線や曲線、単純な幾何学的な図形により簡素化させ、それらを組み合わせたり、反復させたりすることで書法の統一感を持たせていることが明らかとなった。

第 5 章では、鏡に施された篆書の銘文を対象に、その書法史的展開を考察した。

漢鏡銘の書法の変遷は、鏡式や紋様を主とした岡村秀典氏に拠る六期区分と概ね対照により、本論文では、書法的な観点からⅠ類～Ⅴ類の五つに区分することができた。

- Ⅰ類…岡村説の第二期初期のもので、文字が循環せず、紋様の間に挟まれる形で配置される一群。
- Ⅱ類…岡村説の第二期の主要な一群で、文字が鈕の周辺に配され、循環する形状。
- Ⅲ類…岡村説の第三期に該当する。銘文を鏡内に循環させる形状で、円型と方型に細分化することができ、章法においても工夫が見られる。
- Ⅳ類…岡村説の第四期のもので、Ⅰ～Ⅲ類の要素を組み合わせ、発展を遂げた動物紋様鏡の一群。
- Ⅴ類…岡村氏の第五、六期に見られる。装飾的で多様な書法が展開し、特異な形状が特徴である内行花紋鏡の一群が位置づく。

以上の変遷を辿ると、Ⅲ類やⅤ類のように、書法が意匠を凝らす動きが顕著になる際には、紋様の多様化は抑制され、互いに相反する動きを見せた。つまり、紋様を主とし、それらの多様化が盛んに見られる時期と書法の意匠化・装飾化が盛んに見られる時期とが交互に台頭するのである。その理由として、文字自体を紋様化させたり、文字と紋様との調和を図ろうとしたりする意識が働いたことが見通された。

第 6 章では、碑碣に施された篆書の銘文を対象に、その書法史展開を考察した。

漢代の代表的な篆書の碑碣に、嵩山少室石闕銘、嵩山開母廟石闕銘、袁安碑、袁敞碑がある。本論文では、まず嵩山二闕と袁安・袁敞碑の書法的特徴を明らかにするとともに、その書法史的な位置を示すとともに、それにより、篆額書法との関わりを導いた。

袁安・袁敞碑の二碑は、碑首や題額を備えておらず、本文が篆書で書かれた特異な石碑としてこれまで扱われてきた。しかし、この二碑を、廣陵中殿石題字、上谷府卿・祝其卿二墳壇刻石、邪相劉三字残墓表、蘭台令史等字残碑などの篆書の石刻とその外形の縦横比と長脚の比率、縦画・横画、横画間の間隔、起筆・収筆などの観点から比較をすることによって、秦代の小篆と 2 世紀中葉に開花した篆額書法との中間的な存在であった可能性を指摘した。二碑から顕著な意匠化を図ったのが篆額書法であると考えられる。

漢碑の篆額書法は、直線を主体とする重厚な書法の「方筆系」、秦の小篆を踏襲する「秦篆系」、装飾的な書法が展開する「漢篆系」の 3 種に分類できる。漢篆系は、秦篆系に比して、隷変による線質の変化や、分間布白に粗密の変化が生じている。この隷変が、篆書の筆法へ加味され、漢篆独自の書法を生み出すようになる。さらに章法の観点からも、漢篆系では字座を変化させることで、分間布白の粗密に変化が生じている。

また、3 系統を時系列に並べると、長い期間用いられた秦篆系の書法を主流とし、方筆系や漢篆系に属する篆額は支流に位置している。ただし、この時期独自の書法は漢篆系に見出すことができることを指摘した。

第 7 章では、本論文の総括として、各章で検討した成果を包括し、金石の種別を越えて、それぞれの篆書にどのような書法史的展開の共通性が認められるのかを考察した。

初期の頃は、その多くが秦代の小篆に準ずるような書法である。その後に、書法に意匠を凝らすような繁雑化が生じる。この繁雑化には、点画の増加や屈曲を多分に用いた「①空間分割の細分化」や縦横画に「②隷意に由来する線のたわみ」を施し、横画の間隔を詰め、字形を扁平に変化させていることが分かる。さらに、「③章法の変化」として、字面の形状に合わせ、筆画の多寡に応じて、字座を変化させている。この章法の変化によって、字面全体の分間布白の統一を図っている。

そして、その繁雑化が生じた後には、書法の簡素化が起きる。繁雑化と比べると、文字内や字面に余白が生まれる。この簡素化には、点画を省略する「④一定空間の確保」が見られる。また、点画の省略に伴い、一部の点画や文字そのものを単純な円形、方形、三角形など幾何学的に変化させる例も見られる。これらの点画や文字自体を反復させ、強調することで、「⑤紋様化」される意匠が見られる。さらに、「⑥章法の統一」として、繁雑化

で見られた字座の変化があまり目立たなくなり、字座を統一する傾向になる。即ち、各文字での分間布白が異なるようになる。

これらの現象の起因のひとつとして、字面の周囲などに施された紋様との関わりも考えられる。文字と紋様との調和を意識し、そのことによって文字を意匠化させたことが示唆される。その最も顕著な例が、漢鏡の変遷に見られる。文字そのものを紋様化させることで、文字に絵画的装飾の役割を負わせたり、紋様との調和を優先させることで、絵画的装飾と一体化させる役割を負わせたり、その装飾法は紋様の在り方によって決定される。

各種金石類の漢篆には、前漢から後漢にかけて各々時間軸の差はあるが、同様の展開が見られる。即ち、秦代からの小篆に準ずるような書法から、書法に意匠を凝らすような繁雑化が後発的に生じ、後に、書法の簡素化へと向かう。その展開には、先述の①～⑥という共通の類型が認められ、紋様との関わりも漢篆の展開を促す要因の一つと考えられる。そして、紋様の簡素化・繁雑化と相反して漢篆の繁簡の変化が起こることも分かる。つまり、当時の人々は、文字そのものを紋様と呼応させて捉える意識が先行していたことが予測できるのである。

それぞれの金石類は一見すると、その書法の多様さや、様々な意匠化が見て取れるが、以上のように共通の書法的傾向が横断的に機能していることを確認することができた。

今後の課題としては、次の 2 点が上げられる。

1 点目は、対象資料の補充及び拡充である。本論文では、様々な金石類で展開した篆書の書法を網羅的に分析することを目標としたが、具体例が少ない金石類があることに課題が残り、それらの補充を図りたい。また、金石類のみならず、当時の書法を伝えるものに漢簡類などの肉筆資料がある。漢墓からは、篆体で書かれた柩銘や帛書の出土もあり、それらも分析の対象として拡充することで、金石類と同様の展開が見られるのか、考察したい。

2 点目は、本論文で導いた書法上の共通性が認められる要因について明らかにすることである。そこには、地域性や文化的背景、当時の思想との関わりも予測される。それらについて考察を深めることで、広い視野から多角的な論拠を導くことを課題としたい。